

分の頭の中にある眞景から、仕上げる事が出来る、併し若しモ一度現場へ出かけることが出来れば、ソレに越した事はない、併し僕は一言したいのは、寫生と云へば初めから終りまで景色にばかり頼み、自分はラ、クをして居るものゝように考へる初學者もあるが、畫をかくと云ふことは、手でかくのでは無く頭腦でかくのだから、頭の働が鈍なれば、寫生に十日掛ろうが二十日掛ろうが、本當の畫は出来ない、要するにスケッチの研究は一目して自然の色を見、又た之れを正しく見分ける事が出来るように、頭が機敏になるための稽古に外ならぬのである、まだお談したい事も有るが、書盡すことが出来ないから此位にして、又何にか考へが出た時に致しませう。(完)

○繪畫の目的 (繪畫の眞實畫畫法の一節)

吾人は今や展覽會に臨んで専ら技術の巧拙を論ずるものとせんに、或は陰陽又は色彩の巧を稱し、或は配置又は組織の如何を論じ、或は一部の線條を検し、或は一端の遠近を稱す、これら技術上の形貌は、形貌其物を美なりして之を嘆美するものとより可なりと雖も、既に展覽會を去て後吾人が家に齎す處のものは何ぞや、蓋し一の印象に相違なかるべし、然らば即ち其印象は巧に手を描けるよりして得しものなるや、衣服の密畫よりか、美彩よりか、或は布地の眞に迫れるによるか、寶玉の燦爛たるよりか、將た樹木の輕妙なるよりして得たる印象なりや、否、吾人は却てこれ等の外面を忘却するなり、外形其物は未だ深く感動を起すに足らざるなり、蓋し一幀の畫にして苟も大作たるに耐えんものは、必ずや其外形よりも更に強力なる一要素なくんばあらず、而して其要素とは畫家の概念、思想もしくは感情に外ならず、吾人が展覽會よりして齎し歸るものは畫家の意想、想像又は意匠よりして得たる印象なり、吾人は畫家特殊の性情よりして牽起せられたるなり。

*

*

*

*

*

*

*